

# Live the Nembutsu Viver o Nembutsu

お念仏に生かされて

(PowerPoint1)

## 【第 16 回世界仏教婦人会大会】基調講演

仏教研究家

と ろ けい こ  
都 路 恵 子

### 【1: はじまり : お念仏の流れの中にある私の物語】 (PowerPoint2)

本日は大谷光淳おおたにこうじゅんご門主さまご臨席のもと貴重な機会をいただき、光栄に存じます。またこの素晴らしい大会の実現に携わってくださったすべての方々に感謝しております。

(PowerPoint3) さて、このお方は親鸞聖人の奥方・惠信尼えしんにさまですが、父は惠信尼さまのことを非常に尊敬しております。ですから、初めて生まれた子どもが女の子だと知った時、惠信尼えしんにさまの「惠」を一字いただいて、私に恵子けいこと名づけてくれました。私の名前の中に父の願いが込められていると思います。皆さんのお名前の中にも、ご両親の願いが込められているのではないのでしょうか？

(PowerPoint4) そして、私は愛知県岡崎市にある浄土真宗のお寺・本宗寺ほんしゅうじに生まれました。本宗寺は、15 世紀に本願寺第八代れんによご門主の蓮如上人によって建てられ、そのお孫さんじつえん実円様が初代住職です。

実はこのサンフランシスコは、私にとってご縁のある場所で、私の初めての海外旅行先です。高校一年生の夏、私は西本願寺が主催する「青少年国際研修団」に参加することができました。15 歳の私にとっては全てが新鮮で、このカリフォルニアで新しい経験ができた毎日を心から楽しむことができました。私にとって、この北米開教区(BCA)への初めての海外旅行が私の視野を広げてくれました。日本と世界が浄土真宗のお寺でつながっているという感覚を持つことができたのです。

成長して私は西洋の宗教哲学と浄土真宗を学び、福井にある仁愛大学で主に

仏教や浄土真宗を教えました。在職中の 2015 年から 16 年まで 1 年間海外研修の機会をいただき、アメリカ・カナダ・ヨーロッパにある浄土真宗のお寺を視察している際、このカリフォルニアを再び訪れたのです。その折、アメリカのお寺のご門徒さん・メンバーの方々に仏法の思い出話を伺うこともできました。

また世界をめぐる旅を通して、今の地球はインターネットと英語によって密に繋がっていることを実感しました。そして「今後どういう生き方をしたら、後悔しない人生を送れるか？」と長い時間をかけ自分自身と対話することもできました。その結果、「自由にわかりやすく浄土真宗を伝えたい」という心の声に気づくことができたのです。そこでかなり考えた末に、2017 年 3 月大学を退職しフリーランスになりました。今日は僧侶でも学者でもない立場で、今私がいただいている「お念仏の生き方」についてお話ししたいと思います。

## 【2:Live the Nembutsu (お念仏に生かされて) とは?】 (PowerPoint5)

今回の基調講演の内容については、いろいろと考えました。「世界仏教婦人大会」は、5つの地域の方がお集まりで、言葉は英語・日本語・ポルトガル語の3ヶ国語です。しかも大会テーマは「Live the Nembutsu」(お念仏を生きる)という素晴らしいテーマでした。

やる気満々で準備を始めたものの、すぐに行き詰まりました。そもそも言葉も国も文化も違う私たちがともにお念仏を生きるなんて、一体どうやったら可能なのか?と。あまりの難しさに悶々とする日々の中で、家族に相談しました。特に母と弟からはいろいろとサポートやアドバイスをもらいました。その会話の中で、今回の大会地サンフランシスコに思いを馳せると、ある方のお話が思い出されました。

それはサンフランシスコの郊外・バークレー(Berkeley)にある浄土真宗センターのファシリティ・マネージャー(Facility Manager)、グレン・アキラ・カメダさん(日系2世)。カメダさんが、まだ若い頃のお話でした。当時日系アメリカ人の集うお寺で、冬の間ご法座が開かれていました。お父さんたちが導師をして皆で「十二礼<sup>じゅうにらい</sup>」のお経を唱え、交代で法話をされていました。そのお寺へ月に一度、デンバー(Denver)仏教会の開教使であるツノダ先生とタマイ先生が4~5時間かけて交代でやって来てくれたそうです。その時のことをカメダさんは日本語でこう話してくれました。

「先生が来てくれるのを、大人も子どももみんな楽しみに待っていたよ。優しい先生だったよ。先生のお話は物語が多くて、心に響いたんだよ。今も忘れな

いよ」と。開教使の先生方の話してくれた仏法の「物語」が、その後の苦しい状況を生きぬく力になったそうです。

そこで、「お念仏に生きる物語」として私の心に浮かんだのは、親鸞聖人の主著『きょうぎょうしんしょう教行信証』の中に引用されている「にがびやくどう二河白道」の物語です。こちらがその絵です。(PowerPoint6) これは、人間の心の中を描いた一つの比喻です。怒りを表す火の河と欲を表す水の河。その中間にあるお念仏の一本道。今日はこのお話を、私自身の人生に重ね合わせながら、お話したいと思います。では、まずこの絵の物語から始めましょう。

一人の旅人が西に向かって歩いている。この人が果てしなく広い場所にやって来た時、他に人影はなかった。その時、そこへ盗賊や恐ろしい獣がたくさん現れ、この旅人が一人でいるのを見て、われ先に襲いかかって殺そうとした。そこで、旅人は必死の思いで西へ逃げると、突然目の前に二つの大きな河を見た。一つは、火の河で南にあり、もう一つは水の河で北にある。その河は深くて底がなく、果てしなく南北に続いている。その中間にひとすじの白い道がある。幅は狭く 15 センチもないほどだった。この道の長さは東の岸から西の岸まで 100 歩である。その白い道の上にはザバーンと水が激しく打ち寄せ、炎はメラメラと吹き上げ、とても渡れそうにない。旅人はこの大河を見て、こう思った。

「西の岸までそう遠くはないが、どうやって渡ることができよう。東に引き返そうと思えば、盗賊や恐ろしい獣が迫ってくる。西に向かっていけば、おそらくこの水と火の河に落ちるだろう」。旅人は恐れおののいた。しかし、こう考え直した。

「私は今、引き返しても死ぬ。とどまっても死ぬ。進んでも死ぬ。どうしても死を免れないのなら、むしろこの道をたどって前に進もう。すでにこの道があるのだから、必ず渡れるに違いない」と。

こう思った時、東の岸から人の勧める声が聞こえてきた。

「ためらわず、この道を行きなさい。もし止まっていたらきっと死ぬだろう」と。また西の岸に人がいて、こう喚ぶよ声がした。

「疑いなく安心してまっすぐに来なさい。わたしが必ずあなたを護ってあげよう。水の河や火の河に落ちることを恐れなくて良い」と。

この人は、この二つの声に励まされ、迷うことなくこの道を進んだ。

一・二歩行くと、東の岸の盗賊が大声で呼んだ。

「おい、戻ってこい。その道は険しくて、とても渡れない。私たちはあなたの

ことを思って言っているんだ！」と。

この人はその呼び声を聞いても、もはやためらうことなく、ひたすら道を進んだ。時に水の河に溺れそうになりながら、また時に火の河に焼かれそうになりながら、その度ごとに西の岸からの声に励まされて、遂に西の岸にたどり着いた。そして、永久に様々な災いを離れ、善き友と会って、喜びも楽しみも尽きることがなかった」という物語です。

この「水の河」とは、すべてを思い通りにしたいという際限ない欲の心のことです。「火の河」とは、思い通りにならないことに対して抱く怒りの心のことです。私たちの欲が満たされない時、怒りの炎が燃え上がるのです。常にこの水の河と火の河が心の中に渦巻いていて、人間を苦しめている。その二つの河の真っ只中にある「白くて細い道」は、お念仏の一本道。その道は、「東の岸」であるこの世から「西の岸」であるお浄土まで長さ「100 歩」。つまり人間の人生 100 年を表しています。「この道をゆけ」という「東の岸の励ましの声」はお釈迦様の声。「まっすぐに来るが良い」と「西の岸から喚ぶ声」はお浄土の阿弥陀様の声をたとえたものです。

この物語を私の体験の中で味わってみたいと思います。と申しますのは、私は子どもの頃から気性が激しく、思い通りにならないと腹をたてることがよくありました。腹が立った時は「あの人が悪い、この状況がいけない」といつも原因を外に探していました。また私は欲の深い子どもでした。背伸びをして自分を大きく見せようとして、時に無理をし体調を壊すこともありました。心も身体も怒りや欲に振り回されていました。しかし、それが私の個人的なことではなかった。程度の差こそあれ人間は皆そうなのだと教えてくださった方が親鸞聖人でした。ですから、自分の内なる怒りと欲に気づかされる中で、お念仏を生きるこの物語は、私の心に響いてきたのです。

また人生に行き詰まったところで、お釈迦様と阿弥陀様の声を聞くシーンも私の人生と重ね合わせてみたいと思います。その状況の一つが、私が大学教員を辞めるかどうかで悩んでいた時です。現在日本では少子化により、地方の私立大学経営は難しい状況にあります。ですから、私は教員として授業以外に多くの業務をしなければなりません。このまま定年まで勤めるべきか？それとも、一番やりたいライフワークに今チャレンジすべきか？自分の中で葛藤が続きました。恐れを感じて、前にも後ろにも行けず、その場所にとどまることも出来ない旅人に、私は自分を重ねていたのだと思います。しかし、不安を感じながらも「心の声」に従いたいと願っていました。

私の心に恐怖が湧くのは、そもそも私の中に強烈な「欲の水の河」があるからだ。「心の声」に従って人生を生きたい。肩書きや経済的安定、世間からの評価も欲しい。あれもこれもすべて欲しいと「欲」の水に溺れている私の心です。まただからこそ思い通りにならない現実に対して「怒り」の炎が燃えるのです。「すべてを思い通りにしたい」という強い欲と執着が、私の苦しみの大元にありました。

その私に、お釈迦様は「ためらうことなく、ただあなたの信じた道を行きなさい」と勧めてくださっていたのでしょ

う。西の岸から喚ぶ阿弥陀様の声を、私はこう解釈しました。

「欲に溺れていると気がついた時、怒りに焼かれていると気がついた時、不安や恐怖におそわれた時、わたしの名前を呼びなさい。頭に湧いてくる様々な思いはいったん脇に置いて、ただ念仏を称えなさい。念仏を称えながら、今の自分の状態を少し離れた場所から心の目で見てください。念仏の中で心声を信じて、まっすぐにあなたの人生を歩むのだ」と。私はお釈迦様と阿弥陀様の声をこのように受け取りました。実際に大学を退職し、しばらくその道を進むと、また「盗賊などの声」がします。「その道は危ないから戻って来い。私たちはあなたのことを思って言っているんだ！」と。これは、自分のした選択が正しかったかどうかと揺れる私の心を表していると思います。しかし今回はもうその声を聞いても振り返らず、まっすぐにこの道を信じて進んでいます。私は今この絵の中の、お念仏の道の途中にいる旅人です。その私に、この物語は「心

の声」を信じて歩み続ける勇気を与えてくれます。この「二河白道の物語」は、親鸞聖人が尊敬された中国の善導大師が、ご自分の信心の体験を物語のスタイルで表現されたものです。私たちはこの物語を通して、「お念仏の生き方」を味わうことができます。

### 【3: 耳で聞く『教行信証』の世界】(PowerPoint7)

さて、私がこの「二河白道」の物語が引用されている『教行信証』を学んだのは、京都大学の大学院の時でした。ところが実際に学んでみて、とても難しいご本だとわかりました。そこで次に、私の心に『教行信証』が響いてくるまでの物語をお話ししたいと思います。

実は『教行信証』とは、ほとんどが仏典の引用文から成り立っています。親鸞聖人自身の文章は少ないのです。しかもかなりボリュームがあります。元々が漢文で書かれているため、その現代語訳を読んでも、意味がサッパリ分かり

ませんでした。当時出版されている様々な註釈書を読みあさり、あちこちに講義を聞きに行きました。著名な先生方に質問すると知識は増えるのですが、難しくよくわからないという感覚は消えませんでした。

どうにも困った私は、家から自転車で片道 30 分かけて西本願寺のお朝事に通うことにしました。西本願寺では毎朝 6 時から 7 時まで何百年も休むことなくお朝事が勤められています。そこで、50 年間毎朝お朝事に通っているという、とっても笑顔のすてきなおばあちゃんに出会いました。当時 85 歳、青木さんとおっしゃいます。そこで、自分の味わいを嬉しそうに語り掛けてくれる青木さんと一緒に、お朝事に通うようになりました。結局半年ほど通い、身体と心を通す「聴聞<sup>ちようもん</sup>」の大切さは感覚でわかるようになりました。しかし、肝心の『教行信証』については全くわからずじまいだったのです。

そんな風に行き詰まっていた私は、たまたま当時ベストセラーだった大平光代<sup>おおひらみつよ</sup>さんの『だから、あなたも生きぬいて』という本を読みました。その大平さんが司法試験の勉強をしている時のエピソードに私は目が釘づけになりました。『六法全書<sup>ろっぽうぜんしょ</sup>』が難しかったので、テープに録音して繰り返し聞き続けたという記述があったのです。「あっ、この方法があったか！」と大喜びしました。

浄土真宗では「耳で聞くこと、聴聞の大切さ」は繰り返し語られています。しかし、私はずっと『教行信証』を目で読んできた。耳で聞いてはこなかったことに初めて気がついたのです。そこで、単純な私は音読してテープに吹き込んでみました。約 1 ヶ月かけ 2 時間入るテープ 6 本分、11 時間半の長さの音読テープが完成しました。

「よし、これを耳から聴聞すれば、今度はきっとわかるようになるはず！」と意気込んで、そのテープを流してみました。しかし、その独特のリズムに乗り物酔いのように酔ってしまって、気分が悪くなってきたのです。そこで洗濯物を片付けたり掃除したりと家事をしながら、部屋にいる時は BGM のように小さい音量でテープを流し続けてみました。すると、徐々に、本当に徐々にその独特のリズムに私の身体の方が慣れていったのです。3 ヶ月ほど経つと、もう違和感を感じなくなっていました。

そんなある日、焦げついた鍋をゴシゴシ洗いながら音読テープを聞いていた時、ふと気がついたのです。「『教行信証』全ての引用文の根底には親鸞聖人の感動があるんだ。親鸞聖人は仏典にある阿弥陀様の言葉をすべてご自分への説法だと聴聞していたんだ！つまり、『教行信証』とは、「私、親鸞はこのように如来の説法を聞きました」という九十年の生涯をかけた聴聞の記録だったのだ」と感じられたのです。

気がついてみれば、目でこの本を読んでいた時は、私は背伸びをして自分が掴もう掴もうとしていました。しかし、『教行信証』とは如来からの説法を親鸞聖人がただいただいていた。その内容が書かれてあったことに気がついたのです。方向がまったく逆でした。『教行信証』および仏典を難しくしていたのは、逆方向にアプローチしていた私自身だったのです。ですから、頭で仏法について考える前に、まず最初に身体と心で仏法を聞くことの大切さに気づくことができました。

この方向転換が「お念仏を生きる」上での鍵だと思います。(PowerPoint8)人間の目は外向きについていますから、外のことは見えますが、自分のことは全く見えません。その外向きの目を反転させ、私の心の内側を見せてくださる鏡がお念仏です。例えば腹が立った時、外向きの目は、原因は他人や環境にあると思います。怒りを起こすきっかけの人物はその時々で変わります。しかし、「お念仏の鏡の前に立って」心の内を見てみると、(PowerPoint6)この怒りの火の河の存在に気がつくのです。この怒りや欲、そして真実に暗いことを仏教の言葉で「煩惱<sup>ぼんのう</sup>」といいます。

この煩惱とお念仏の構造を絵に描いてみました。こちらです。(PowerPoint9)人間の煩惱を青色で、阿弥陀様の世界を赤色で書いてみました。

物語の中で何度も登場した「すべてを自分の思い通りにしたい」というのが人間の本性です。それは、まるで「とらわれの色メガネ」をかけている状態でしょう。「こうあるべき」という自分の「色メガネ」を通して他人と自分を見えています。そのとらわれに現実が一致していれば、「もっともっと」その現実が欲しくなります。そして、心が水の河に溺れます。反対に自分の思いに現実が反していると、怒りが湧きます。心が火の河に焼かれている状態です。

また人間関係で「ケンカ・争い」が起きた時、私の側からすると、私が正しく、相手が間違っています。しかし、相手側からすると、相手が正しく、私が間違っています。つまり、すべてのケンカは正義と正義の争いなのです。身近な所では家族や友人・知人の間で起きます。これが大規模になると、世界戦争になります。

ケンカや苦しみ・ストレスは人間自身が作り出している。苦しみは現実の中にではなく、私たちの心の中にあるのです。そのことに親鸞聖人は気づかれ、その人間全体の性質を「悪」と呼ばれました。親鸞聖人のおっしゃるこの「悪」の意味を理解することが浄土真宗では非常に重要です。それはキリスト教の「悪」とは違いますし、善の反対の悪という一般的に使われている意味でもありません。苦しみを自ら生み出す、すべての人間の性質を親鸞聖人は「悪」と呼んでいるのです。そして、そのような煩惱いっぱいの人間のことを

浄土真宗では「凡夫<sup>ほんぶ</sup>」と言います(PowerPoint10)。

だからこそ、お念仏によって私たちの「悪」がいのちのつながりである「徳」に転じられるのです。この世では怒りや欲、とらわれなどの煩惱<sup>ぼんのう</sup>が私たちから消え去ることはありません。だからこそ、日常生活の中で私たちが内なる煩惱に気がつく時、その時がお念仏を称え、私たちへの仏法を聞く素晴らしいチャンスの時になるのです。お念仏を称えながら悪を徳に転じられ、私たちは阿弥陀様と共に今ここで、心的心声を信じて人生を生きることができるのです。

親鸞聖人と恵信尼さまは、それぞれの心的心声を信じて結婚されました。その結果として、家族皆が一緒に仏教を生きることができる「浄土真宗」という新しい仏教のスタイルがこの世に誕生しました。

その後、後を受け継いだ蓮如上人は、わかりやすいお手紙『御文章』という形で『教行信証』のエッセンスを一般の人々に伝えられました。加えて、各家庭にお仏壇を設置することで、「お念仏の鏡の前に立つ」場所を作ることを提案されます。そして毎日お朝事とお夕事をするので、一日2回「お念仏の鏡の前に立つ」。そのような生活スタイルを作ることも提案されました。シンプルな実践方法を提案されたことで、浄土真宗は日本全国、そして今、世界各地に徐々に広がりつつあります。

#### 【4:世界のどこでも可能なお朝事スタイル、お念仏の鏡の前に立つ時間】

(PowerPoint11)

親鸞聖人・恵信尼様・蓮如上人からの流れの中にある今回の「世界仏教婦人大会」です。ですから、今私が実践している、世界のどこでも可能な「お念仏を生きる」方法の一つをお話したいと思います。

その実践方法として、私が新しいお朝事スタイルを模索するようになったのは、京都を離れ、昔ながらのお朝事が自宅ではできなかつた為です。と言いますのは、家にお仏壇はありましたが、隣の部屋の音が聞こえてしまうマンション暮らしですと、朝早くや夜遅くに大きな声でお経をよむことはできません。そこで毎朝「お念仏の鏡の前に立てる」場所として、早朝のカフェが静かでないのではないかと思いつきました。この時間を、私は個人的に「カフェお朝事」と名付けました。もちろん、カフェで声を出してお経をよむわけではありません。大学に勤めていた頃のカフェお朝事は、こんな感じです。

出勤前、たとえ短い時間でもカフェで美味しいコーヒーを飲みながら、その

時読みたい仏教書を読み、ふと心に浮かんだことをノートに書く。心の声を聞く時間でもありました。その時読む本は、元気がある時とない時で変わります。元気がある時は、いろいろな仏教書も読めます。問題は心が乱れている時、元気がない時です。そんな時、私は決まって一冊の本しか読めませんでした。

それが、鈴木章子さんの『<sup>あや</sup>癌告知のあとで』というお念仏の詩集です。私が22歳の時に初めて読んで以来、何百回も読んでいる本です。本当に辛い時、このお念仏の詩が心に染み入ってきました。この本の著者は、北海道にある浄土真宗のお寺の坊守<sup>ぼうもり</sup>さんでした。その章子さんが乳癌を患い、治療を受けながらもその時味わっていた「お念仏に生かされて」いる実感を4人の子どもさんに伝えようとされたのです。その思いを詩の形で<sup>のこ</sup>遺されました。そんな彼女の47年人生最期の詩が、いつも私に力をくれました。それは全身に癌が転移し、命終の25日前に口で夫に伝え、書き取ってもらった詩です。

念仏は  
私に  
ただ今の身を  
納得して  
いただいてゆく力を  
与えて下さる

(PowerPoint12)

この詩を読むと、私はいつも力が湧いてきました。特にその時の状況が辛いと感じている時ほど、この詩に力をもらっていました。今日1日だけ「ただ今の身をいただいてゆく力」をもらっていきこう。そう感じて、私はこのカフェお朝事を終えていました。自然と意識のスイッチが切り替わっていました。たとえば20～30分でもこのカフェお朝事をすると、その後の日中の時間、例えば腹が立った時などお念仏を称えやすく、お念仏に戻りやすくなりました。

私は、このカフェお朝事を何年も続けています。それは私にとって心地よく阿弥陀様のまなざしを感じる時間だから、自然と続くのでしょう。海外を旅している時も、それぞれの土地の素敵なカフェで、このカフェお朝事を続けることができました。しかもWiFiがつながるカフェでは、スマートフォンを通して世界中どこからでも京都・西本願寺とつながることだって可能なのです。

ちなみに私の母も、早朝近所の静かなカフェに通って仏教書を読んでいます。お寺の坊守兼僧侶なので、日中お寺の仕事はいくらでもあります。ですか

ら一旦すべての役割から離れ、落ち着いてしばし仏法に浸るカフェお朝事が、母にとっても至福の時間だということです。

もちろん、「お念仏の鏡の前に立つ」方法は人それぞれだと思います。また人によって心のスイッチが切り替わる仏教のことばや本は違うと思います。どんなスタイルでもいいのです。この毎朝お念仏を思い出す時間は、私たちが怒りに焼かれっぱなし、欲に溺れっぱなしの状態に陥るのを防いでくれます。

なぜなら、人間の集まりである社会全体に、とらわれの色メガネがかかっているからです。私たちすべての人間に怒りや欲、執着（とらわれ）などの煩惱があるからです。その社会の中で私たちはどうしても影響を受けてしまいます。

だからこそ、今日 1 日は外に見える現実世界にはとらわれず、視点を内側に向けお念仏とともに生きよう。1 日の始まりである朝に、そのことを確認する時間を持つことが大切だと思います。その 1 日 1 日の積み重ねが一生を通して、仏法を聞き深めていく力を与えてくれるのでしょう。

伝統を伝えるというと、時代や国が変わっても全く変わらないスタイルを続けることと捉えがちです。今までずっとそうしてきたのだから、同じことを続けよう。これは、すべての文化において言えることだと思います。しかし、私たちが行っていることの意味を再確認することも大切かもしれません。例えばお朝事で言えば、親鸞聖人・蓮如上人の意図することが明確になれば、時代や地域、またそれぞれの文化やライフスタイルに自然に溶け込む形で変化させることも可能だと思います。

時代を超えて、世界中でお念仏の生き方を実践したいと心から願う時、どの地域でも実践できるよう工夫していくことは必要かと思います。このカフェお朝事も、世界中でお念仏を生きるための、新たな一つの方法かもしれません。

#### 【5:親鸞聖人、そして私たちにとっての Live the Nembutsu!】

(PowerPoint13)

もちろん本来のお朝事において、お経を皆で一緒に称えることは素晴らしいことです。その声が響きあう中で「いのちのつながり」を身体と心で感じるができるからです。このお経の持つ力を私に再確認させてくれた方が、先ほどご紹介したカメダさんでした。若い頃、お寺で称えた「十二礼」のお経。昔先生たちやお父さんたちと一緒に唱えたイメージ。そのイメージや先生方の法話のイメージがいつもカメダさんの心の中にあるそうです。七十年以上、縁ある人たちの「十二礼」の声の響きとともに人生を一緒に旅して来たような気が

すると。そのおかげで、ご自分の仏法の旅路をこんな風に味わえるようになったとおっしゃっています。

「過去に経験した人生の困難を通して、お念仏が少しずつわかるようになり、私も煩惱を持った「凡夫」の一人だと感じるようになりました。そして、人生経験とお念仏の中でのささやかな目覚めが、今私に感謝と喜びの人生を与えてくれています」と。(PowerPoint14)

このカメダさんのお話は、私に親鸞聖人の人間とお念仏に対する深い理解を思い起こさせてくれます。お念仏の鏡の前に立つことによって、親鸞聖人は、煩惱によって苦しみや争いを生み出してしまふ、人間存在の悪に気づかれました。お念仏の中で人間の本性を知ること、私たちの怒りと恨みが人間に対する悲しみに転じられ、溶かされていきます。阿弥陀様の智慧と慈悲によって、煩惱いっぱいの凡夫である人間に対する阿弥陀様の悲しみを感じるからです。だからこそ、私たちはお念仏の中で、その阿弥陀様と共にある深い感謝と喜びを、私たち人間存在への阿弥陀様の深い悲しみの中で感じることができるのです。

お念仏の旅人の心から流れる涙を、親鸞聖人は「悲喜の涙」悲しみと喜びの涙とおっしゃいました。これが「お念仏に生かされて」いることの深い意味でしょう。

そのお念仏を聴く場所は、お寺の本堂ではありません。(PowerPoint8)「お念仏の鏡の前に立つ」朝の時間を毎日とることで、苦しみやストレスを生み出す私たちの「心」が、阿弥陀様の言葉を聴く最高の本堂になるのです。

生活すべて、人生すべてがお念仏を称え、仏法を聴く場所になるのです。(PowerPoint6)それが、怒りの火の河と欲の水の河の真っ只中にあるお念仏の白い道を、生涯ずっとお念仏を称えながら歩み続ける人生だと思います。

そのなかで「本当に自分自身が輝く生き方とは、どのように生きることなのか？」お一人お一人の内なる心の声が、その答えを教えてくれることでしょう。それが今大会のテーマ「お念仏に生かされて」(PowerPoint1)生きる人生だと、今の私はいただいております。

## 【6:エンディング：お念仏の響きあう「今」】(PowerPoint15)

今回のこのお話は、アメリカの世界大会スタッフの方々と家族の手厚いサポートの中で形にすることができました。

また今回3ヶ国語でこのお話をさせていただくにあたり、アメリカ・ブラジ

ルの開教使の方々にご協力いただきました。本日の英語の通訳は、サンマテオ仏教会(San Mateo Buddhist Temple)のヘンリー・アダムス(Henry Adams)先生がご担当くださいました。そして、私の拙い英語の草稿を美しい英語に直してくださった方が、オレンジ郡仏教会(Orange County Buddhist Church)のマービン・ハラダ(Marvin Harada)先生です。また日本語の私の原稿からポルトガル語への翻訳を担当してくださった方が、ブラジル、リオ・デ・ジャネイロ本願寺の土井慶造先生です。このように世界各地のそれぞれのお寺において、地道にそして誠実に浄土真宗の教えを伝えてくださる開教使の先生方のご尽力が、現在もそして過去にもありました。その長年にわたる積み重ねのおかげで、今、このような盛大な世界大会がこのサンフランシスコの地で開かれているのだと思います。今回のこの3ヶ国語のスピーチは、最高のチームワークの結果、実現することができました。そして今日は3人で一つの声となるようお話しさせていただきました。

でも最後は、言葉と国を超えたいのです。なぜなら、私たちをつなぐ「南無阿弥陀仏」のお念仏は言葉も国もそして時代も超えているからです。最後にここにお集まりのアメリカ・カナダ・ハワイ・ブラジル・日本の1700名を超える皆さまと一緒に念仏を称え、その声の響きを感じたいと思います。ただ念仏を称え、ただ念仏を聞く。このメンバーだからこそできる「念仏の響き」を身体と心で感じて、今回のご縁を結ばせていただきます。いつもより大きな声で、少し長めにお念仏申しませう。

御本尊に向かって合掌。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏~~~~~

礼拝。

これから日常生活で心乱れることがあっても、この「念仏の今」に戻って、地球上のそれぞれの場所で「念仏に生かされる人生」を、ともに歩んでまいりましょう。ありがとうございました。

Muito obrigada. And thank you very much.